

夜を僕（しもべ）として男は踞っていた。
その影は闇よりも濃い闇。

男は月光に手を翳し、大蜘蛛のような長い指を蠢かす。その手は最愛の女を惨殺した手。猟奇の果てを掴んだ手。

その指で銀色の髪を掻き上げた。

細く開いた切れ長の目が、月を映す。

絶望が瞳を彩った。

うう、と嗚咽が漏れる。

爪で膝を掻きむしる。

慚愧の想いが彼を責めさいなんでいるのだ。

彼は村田喜久次郎。

平成の猟奇王である。

今は退廃の天幕の下、暗黒を褥（しとね）に眠る彼を、何がここまで苦しめるのか。それは記憶である。

生まれてから作家村田喜久次郎として暮らすに至るまでの、生きていた記憶のすべてを、喜久次郎は消し去りたかった。

そのおぞましい俗人ぶりを、彼は心の底から死ぬほどに恥じていた。

皆川香織恐るべし。

彼女によって与えられた高貴な精神が、今までの彼を全否定するのだ。

葬り去りたい過去、特に入谷由佳とのあれやこれや。

ホテルのバーで交わしたあんな会話。枕元で熱に浮かされたように口走ったあんな台詞。

時折それらの恥ずかしい記憶が泡のように意識へと浮かび上がると、平成の猟奇王は羞恥に身悶えして嗚咽を漏らすのだった。

過去を知る者をすべて屠る。

羞恥の波に翻弄されながら、喜久次郎は決意した。

入谷由佳はもういない。

だがまだ、私の過去をはっきりと知る者がいる。その過去の私を、侮蔑し罵った、たった一人の女。

その名は皆川香織。

半身の月へと、喜久次郎は誓った。

皆川香織をこの世で最も残忍な方法で殺してみせると。

日下部俊太郎は悩んでいた。

バイトで雇った雑用係。皆川香織の事である。

確かにバイトで雇ったはずなのに、彼女はもうしてあんなに偉そうにしているのか。そして誰も社長である日下部俊太郎ですら彼女に逆らえないのか。

その秘密を探るべく、ある日の朝から、日下部は皆川を尾行したのだった。

最近でこそ雇った探偵に任せてはいるが、かつては彼も地道な浮気調査を続けてい

た一探偵だったのである。

彼女がマンションに一人住まいしてることは既に調査済みだった。そのマンションを彼女が出たのは午前十一時四十五分である。いくら大学から近いとはいえ、事前に調べておいた彼女がこの日受講すべき『犯罪心理学ゼミ』の時間とおに過ぎていた。

授業を受けるつもりは到底ないようである

。香織は校舎の裏側にある彼女たちのイベントサークルの部室へと直接向かった。ここからは彼の盗聴の成果である。

「何、この花」

男の声だ。

「きれいでしょ。この前のキャンプで摘んできたのよ」

答えた声には聞き覚えがある。間違いなく香織のものだ。が、何かが決定的に違う。

「ねえ、この花の花言葉、知ってる？」
この甘えた声。

日下部にはとてもこれが香織とは思えなかった。だが声は間違いなく香織の声なのだ。そして今、この部室には二人の人間しかいないことも確認済みだ。

「花言葉なんか知らないよ」
男が言った。

「じゃあ、教えてあげようか」

信じられないほどのべたべたした声だ。音程が二度ほど高い。猫撫で声というか、子猫そのもののような可愛い声だ。

「花言葉は『恨み』。ねっ、変わってるでしょ」

得意げだが、なによりも媚びがはつきりと聞いて取れる。

「それってどうせ、全部、誰かの話の受け売りだろ」

「あれ、ばれたか」

あつ、絶対今おまえ舌をべろっと出しただろ。

日下部はつい、一人でそう呟いた。

「それにしても、これはどういう事だ。これじゃあ、どう聞いても男にメロメロの馬鹿女じゃないか」

日下部は盗聴機のイヤホンを耳から離れた。

「ということはつまり……牧村弘樹こそが皆川香織の最大の弱点だということか」

「考えたことをそのまま口にする癖は、探偵としてはどうなのかしら」
言われて振り返り、思わず日下部はひいと情けない悲鳴を上げた。

「どうしてここに」

日下部の真後ろに、香織が立っていた。

ふっ、と彼女は鼻で笑った。

「あなたごときの尾行に、私が気づかないとでも思ってた？」

「しかし……それでは今のは」

「朝から気がついていたわよ。それであなたのお手並みを拝見させてもらったわ。さすがは探偵社の社長。相手が私でなければ成功したでしょうね、七十五点」

微妙に日下部は喜んだ。

「馬鹿者！」

香織が怒鳴ると、日下部は三十センチほど垂直に飛び上がった。

「百点でないことを嘆きなさい。それでなければ、一生あなたは七十五点の男よ」

それならそこそこ良い人生だよなあ、と思いはしたが顔に出さないように最大の努力をした。

「あなたもどうやら俗人の臭いをプンプンさせているようね」

香織は鼻をひくひくさせた。

「オスカー・ワイルドは言ってるわ。俗物はミルクを拭いた雑巾よりも臭うってね」

「良くは知らないけれど、それは嘘のような気がする」

「良く知らないなら発言するな！」

「すみません」

思わず頭を下げる日下部であった。

3

左右不均等なその燭台には、十三本の蠟燭が立てられている。それは十三の音階と十三の惑星を象徴しており、それに灯をともしことは世界の死と再生を意味する、はずなのだが、今それは七本の蠟燭にだけ灯がともされている。その意味する物は死。

世界燭台は、ただ穢れた死を指し示すだけの、忌まわしい燐光を発していた。

その爛れた輝きに、ぼんやりと人影が二つ、映っている。

一人は椅子に腰を下ろし、一人は立っていた。

立っている初老の男は平成の猟奇王、村田喜久次郎だ。

椅子に座った人影と、喜久次郎とは怖ろしく似た雰囲気を持っていた。

喜びのために人の命を絶つことが出来る人間。人の苦痛をその糧として生きる人間。ひとでなしと呼ばれる、歪んだ魂の持ち主。

「ありがとう」

喜久次郎は言った。

「助かるよ」

「いいさ」

ぼんやりとした影は言う。

「一人で無聊をもてあましていたのさ。こんな大きな屋敷でたった一人で暮らしているのね。語り合える来客は久しぶりのことだ。あなたが望むならいつまでいてくれるもいい」

「ここは臭う」

「わかるかい」

「ああ、わかるとも。これは」

「そうさ、人を燃やした臭いだ」

「知っているとも。それもただ遺体を燃やしたわけではない。臭いの中に恐怖と絶叫が混ざっている」

二人は静かに笑った。

「わかるかね」

「わかるとも。経験があるからね」

「あなたがこれから何をするつもりかは知らないが。なかなか楽しそうだ」

「楽しいよ。やりたいことをやっているのね」

「成就の時までここにいるがいいさ。君の望みが叶うことを祈っているよ」

「ありがとう。お言葉に甘えさせて貰うよ」

「ここなら誰にも見つからない。私がそうであるようにね」

死を示唆する七本の蠟燭の火が、ゆらゆらと揺れた。

4

「あのですね、娘のことで相談がありました」

禿げ上がった頭を汗でてらてら光らせながら、その中年男は言った。その第一声が
出るまで、たっぷり十分かかっていた。

ソファーに深々と腰掛けた香織は、冷たい目で男を見ている。

男はタオルを取りだして顔の汗を拭った。何もしていないのに息が荒い。

香織は相変わらず凍り付く視線で男を見ていた。耐えきれず、男は話を続けた。
「それですね。その娘なんですけど、どうやら、その、なんていうか、男ができたよ
うなんですが……」

「彼氏の身元調査ですか」

つまらなそうに、香織が言った。

「ええ、身元調査と言えばそうなのですが……」

それで？ と目でうながす。

「その男が、どうも犯罪に関係しているんじゃないかと思ひましてですね」

やはり香織は何も言わない。

男は覚悟したように、話し始めた。

「私は宮澤充と申します。某家電メーカーに勤める会社員です。結婚して二十年、
娘がおりまして、梨花という、まあこれは父親の口から言うのもなんなんです
が、非常に美しい娘でしてね、しかも頭もいい。現在国立大学の学生ですよ。それが
すね、その、男が出来まして、この男がなんと六十に近いと言うじゃないですか。考
えられますか？ 娘はまだ十九歳ですよ。番茶も出花をわずか一年しか過ぎてい
ないんですよ。成人式前ですよ。それなのに、そいつは私よりも十近く年寄りなわ
けですよ。これはもう犯罪でしょう」

「あなたは」射るような視線で、香織は宮澤を睨んだ。「その娘さんと寝ましたか」

「えっ……そりゃあ、小さい頃は添い寝して」

「違う！」

香織はテーブルをバンと叩いて立ち上がった。

「娘とまぐわったかと聞いているのよ」

「はあ？」

「わからないの？ 禁断の愛に身を任せたことがあるかと聞いているの」

「何を言ってるんだ。君は馬鹿か」

「馬鹿はおまえだ」

びしっ、と宮澤を指差した。

「近親相姦、それは異端のエロス。娘を娶る気概がなくて、何で娘なんかを生んだ
の！」

「おちやくちゃだ」

「人とは整合性のない生き物なのよ。で、その相手の男の名は」

「確か、キクタムラジロウとか言ってました。画家だと言ってますが、そんなものは無
職とかわらんですよ」

言うてから、また香織が怒鳴り出すのではないかと様子をうかがった。

香織は顎に手を当て、何事かを考えているようだ。キクタムラジロウと何度も呟い
ている。そして怪しく微笑むと、言った。

「わかりました、引き受けましょう」
「えっ？」

「引き受けようと言っているのです。それはもしかしたら、とんでもない猟奇事件に繋がっているかもしれないですよ」

香織の微笑みに、宮澤は冷水に使ったかのように鳥肌が立ったのだった。

5

「用意が出来ました、お嬢様」

黒のロングコートを着込んだ中年男ピロ、こと大林宏重「ひろしげ」はそう言うとき香織に恭しくリモコンを手渡した。

メルセデス社につくらせた特別仕様車の中である。長大な黒塗リムジンの車体の中に、ゆったりとしたソファが置かれ、その前に並んでいるのは四台のモニターである。

そのモニターには、どこかのマンションの一室が映し出されていた。

ワンルームマンションだ。四つのカメラで部屋の中を余すところなく映し出すことができる。

香織は腕時計を見た。ドクロがデザインされたアナログ時計が午後六時三十分を差している。

「そろそろ帰宅するはずですよ」

宏重がそう言った。

その直後に玄関の扉が開いた。入ってきたのは若い女性だ。どこといって特徴のない地味な女性だった。それが宮澤の娘、梨花であった。

「今日、キクタムラジロウが家を尋ねてくるはずですよ。大学で盗聴いたしました、ケイタイで約束しているのはつきりと聞き取りましたから、間違いないですよ、お嬢様」
香織は宏重の台詞に鷹揚に頷いた。

男を迎える準備であろうか。梨花は食事の支度を始めた。なかなか手際がいい。

瞬く間にカレイ・ライズとサラダが出来ていく。

その甲斐甲斐しさとその部屋の所帯じみた雰囲気とが合わさって醸し出される生活感に、香織は激しく苛立った。

玄関が開いた。

男が入ってきた。しょぼくれた初老の男だ。

香織がリモコンを操作すると、男の顔がアップになった。かなり解像度の良いデジタルカメラが使われているらしく、拡大してもその鮮明さに変わりはない。その画面を仔細に見つめて、香織は溜息をついた。

「違うのか……」

がつくりと肩を落とした。

が、すぐに邪悪な笑みを浮かべながら顔を上げた。立ち直りが早いのだ。

「いや、まだわからない。変装は怪人のたしなみですからね。行くぞ、ピロ」

香織は宏重を引き連れ車を出た。

マンションの前は狭い私道だ。香織の巨大といっても良いだろうリムジンは、黒い壁となつてそこをすっきり占領してしまっている。しかし香織も宏重も、そんなことは微塵も気にしていなかった。

黒いコートを翻しながら、宏重が先導する。オートロックの玄関扉は、ここに書くとき差し障りがあるので書けない、マンション業者なら誰でも知っているある裏技を使って

宏重があっさりと開く。

「こちらです、お嬢様」

扉の奥へと香織を迎え入れ、エレベーターで五階へと向かう。目指すは五〇三号室。獵犬の如く、宏重は迷うことなく一直線に部屋へと向かった。

扉の前で尾を振って待つ。

表札に『宮澤』と表札がかかっていた。

香織が玄関前に立つと、見慣れぬ工具を取り出した。ピッキングのための工具だ。古いこのワンルームマンションは、あれほどピッキングが騒がれていたにもかかわらず、鍵は未だに最もピッキングがしやすいディスクリッター錠だ。ストッキングで覚えてた香織のピッキング術にかければ施錠されていないのかわりない。扉は一瞬で開いた。

躊躇うことなく扉を開き、香織は先頭になって部屋の中へと入っていった。土足だ。ついでの後ろから付いてくる宏重も土足だ。

狭い部屋だ。玄関から居間まで一直線だ。隠れるところもない。部屋の中の二人が一斉に香織たちを見た。

誰？

事情もわからず、女は不思議そうな顔をしていた。しよぼくれた初老の男は、精一杯の威厳を保ちながら言った。

「君たちは何ものだ」

「皆川香織。獵奇を愛する誇り高きゴスの乙女。これは第一の僕、ピロよ」

なんのことかさっぱりわからず、梨花とキクタムラジロウは、ただきょとんと二人を眺めていた。

香織はつかつかとキクタに近づくと、その白髪を掴んでぐいと上に持ち上げた。

「何をする！」

香織は無視して、男の頬をつまんで引張る。首筋のあたりを擦る。最後は唇の端に指を突っ込んで左右に引いた。

「わっ、わっ、わっ、はにをふる」

「ええっ、変装じゃないの？」

「変装？ 何を言ってるんだ。いい加減にしろ。第一なんだそれは」

キクタは香織たちの足元を指差した。

「二人とも土足じゃないか。警察を呼ぶぞ」

キクタは電話の方を見たが、その前には宏重が立ちふさがっていた。

「警察ごときに怯んでいては探偵なんか出来ないわ。で、それは本当に本物の顔なの？ 変装じゃないの」

「当たり前だ」

「タイミング的には今しかないわよ。ここでちゃんと正体を現しておかないと、困ったことになるわ。考えてご覧なさい。一人になってからだど、ふはははとか笑いながらマスクを剥ぎ取ることはもう出来なくなるのよ」

「一体何の話をしているんだ」キクタは困惑顔だ。

香織は舌打ちした。

「ほんとに関係ないのか……」

「あなたたちは何者なんですか」

半ば怯えつつそう言ったのは梨花だ。

「私はあなたのお父さんに頼まれて、彼のことを調査していたのよ。あの平々凡々たる俗物爺さんのことをね」

「そこまで言わなくても」

哀しそうにキクタは俯いた。そんなキクタとは無関係に、梨花は苦悩の表情を浮かべていた。

「お父さんがそんなことを……そうですか」

「彼が何か犯罪にかかわりがあるのではないかと、お父さんはそう思われています」

「どうしてそんなことを……あっ」

「心当たりがあるようね。だいたいは想像つくわ。もうすぐお父さんの誕生日ですよ」

「どうしてそれを」

ふん、と香織は鼻先で笑った。

「下らん。実に下らん。あなたたちのような俗物は絵に描いたような三文芝居人生を送るに決まっているわ。俗人は魂に俗っぽさが刻まれているのね」

香織は指先でとんとんと机を叩く。

梨花には香織の苛立ちを全く理解できない。

「あなた方は結婚をお父さんに反対されていた。だからあなた達は二人協力してお父さんの誕生日を大々的に祝い、お父さんを驚かそうと考えた。好印象を与えるためにね。ところが、秘密に誕生日会の計画を進めているのを、お父さんは何か良からぬことを企んでいるのだと勘違いした」

「なんで、なんでそんなことがわかるの？」

「そんなこと、四十年前の吉本新喜劇の台本に書かれているわよ！」

「えっ、本当ですか」

「信じるな！」

大声で怒鳴りつけた。

「その善良さが私を辟易させるのよ」

よろよろとよろめき、香織は額を掌で押さえ俯いた。今にも倒れそうだ。

「お嬢さま」

宏重が手を貸そうとする。その手を払いのけて香織は言った。

「大丈夫。私はこんなことで俗世間に負けないわ」

きつ、と顔を上げ香織を睨んだ。

「平凡そのもののあなたの中で、唯一個性と呼べるものはこんな」

キクタを顎で指した。

「凡人の普通のただの老いぼれを愛したこと」

「ま、まだ、六十だぞ」

キクタが胸を張った。

「年齢ではないわ。魂が老いぼれているのよ。で、あなた」

香織は梨花に近寄った。

「どうして冴えない年寄りが好きなの」

「えっ、それは……」

「それは？」

「わかりません」

「それが俗人の特徴なのよ。自分のことは何もわからない。何もかもが無意識。特にあなたは周りに流されるだけ流されてきたようね。まるで川におちた木の葉だわ。まあ良いでしょう。私が教えてあげましょう。あなたが何故冴えない年寄りを愛するのか。そのためにまず、あなたには理解してもらわなければならないことがある

わ」

香織に至近距離で見つめられ、梨花はごくりと息を呑んだ。

「良いこと、あなたの年寄り好き。老人愛とでも呼ぶべきその性癖は、立派な異常性愛なのよ」

患者に不治の病であることを宣告するように、そう宣言した。

「えっ……」

動揺する梨花に、さらに香織は言い募る。

「あなたは病氣よ。変態よ。異常者よ」

「そんな……」

どう答えていいのかわからない梨花に香織は近づき、耳元で囁いた。

「そんな変態性欲者に、あなたは どうして なってしまったのかしら」

聞きたくなくても言うように、梨花は顔を背けようとする。その顎を掴み、香織は口づけでもするかのように顔を近づけて、言った。

「あなたは子供の頃、父親に犯されたのよ」

「えっ、そんな、なんてことを。あり得ません。絶対にありえ」

途中で遮り、香織は断言した。

「あつたのよ」

「本当か」

キクタが間に入ってきた。

「どうして私に話してくれない」

「嘘よ。まったくのデタラメだわ。私はそんなことしていません」

「あつたのよ」

地動説を告げるが如く、香織は自信に満ちた声で言った。

「おそらくそれはあなたが八歳の時だわ。あの中年男であるところのあなたの父親は、その時脂ぎった変態性欲を剥き出しにして、あなたのベッドに忍び込んできたのよ。それ以来ずっと関係が続いていた。最初のうちこそあなたは抵抗していたが、暴力を振るうかと思えば、泣きながら哀願する父親に負けて、あなたは何度も、時には自分からも身を任せた」

「それは嘘です」

泣き出しそうな顔で梨花は言う。

「そんなことをした覚えはありません」

真っ赤になってそう言う梨花の肩を、香織はぽんと叩いた。

「脳には、あまりにもおぞましく辛い記憶を、頭の中から追い出し、記憶から消してしまう仕組みがあるのよ。あなたはその忌まわしくもおぞましい体験を、頭の中から追い出し忘れ去ったつもりでいた。いや、実際今まで思い出すことはなかった。だがしかし、その忌まわしい過去を完全に忘れ去ることも出来なかった。意識することにはなかったが、しかし確実に罪悪感があなたを蝕んでいく。そこで、また新たな脳の改竄が行われた。あなたはあなたの中に、老人に身体を捧げることが至極の愛であるという人格を育てたのよ。『だから私の過去に何があったにしても、それは美しくも正しい行為だった』とあなたは自分を納得させた。だからあなたは、老人しか愛せないのよ」

「なんてことだ」

キクタは頭を抱え、その場にしゃがみ込んだ。

「そうだったのか」

違うわ、と梨花は口の中で小さく呟いた。そんなことは、そんなことは、と繰り返

すが、既に彼女は自身の記憶を疑い始めていた。

そして香織は真理を告げる者の絶大な自信を持って、梨花へと告げる。

「間違いない。あなたの過去は呪われているのよ」

「私は……呪われている」

「その通り。ようやく思い出してきたようね。その呪われた過去を清算するには、どうしたらいいかわかる？」

梨花は力無く首を横に振った。

「あなたにかけられた呪いは、単に父親と似たような老人と愛し合うことでは解消できない。それはその場のごまかしにしか過ぎない。いい、良く聞いて。その呪いは、あなたの行動によって解かれることになる」

「私の行動……」

香織は正面から梨花の両肩を掴んだ。

「あなたに消えぬことのない烙印を押した相手を」

そこで間を空け、何もかも見通すような鋭い目で梨花を見つめた。

「相手を？」

梨花が恐る恐る尋ねた。

そして香織は神託のようにそれを告げた。

「消すのよ」

「消すって、まさかそれは……」

香織は深く頷いて、言った。

「殺すの」

「何を言ってるの」

さすがに梨花も声を荒げた。

「そんなことが出来るわけじゃない」

「出来るわ。相手はあなたを犯して、あなたの人生を台無しにした最低の男なのよ。今決意しないと、あなたは今以上に最低の人生を送ることになるのよ」

香織は両肩をもって激しく揺さぶった。

「最低の……」

首がすわっていないのかと思えるほどぐらぐら頭を揺すられながら、梨花は呟いた。「人間としてこれほど下劣な行為はないでしょうね。いいこと、どんなことが行われたのか、あなたの頭の中でしっかりと描いてみるのよ。まず脂ぎった中年男が幼いあなたを押さえ込み(編集部注：ここから聞くに堪えないようなおどろおどろしい変態行為の細密描写が延々十分間に渡って続けられたので省略します)そしてすっかり傷ついてしまったあなたを、それでもなお自分の元に留め置き奴隷として仕えさそうと考えているのよ。決断の時は今しかないわ」

梨花は膝からがっくりと崩れ落ち、そして声を上げて号泣した。

「さあ、変態老人」

香織はキクタを指差した。

「ええっ、それって私のことですか」

「そう、おまえだ。もしおまえが彼女のことを本当に愛しているのなら、彼女の僕(しもべ)となれ。それだけがおまえにできる、たった一つの彼女への償いなのだ」

「な、なんで償い」

「罪！」

びしりっ、とキクタを指差した。

「年端もいかぬ孫のような少女を陵辱した罪よ」

「そんな、私は彼女のことを愛して」
「六十を過ぎた凡人が愛を語るんじゃない！」
怒鳴られ、つい頭を下げてしまふキクタだった。

5

『結婚を反対され父親を殺害』

その日の新聞やニュースでは、宮澤親娘のことがそのように大々的に報道されていた。

香織はリビングでテレビを見ながら、ひとり呟いた。

「キクタはどうしたの」

どのチャンネルに変えても、報道されているのは逮捕された梨花と殺された父親の話ばかりだ。キクタの名はどこにも出てこない。結婚を反対されたという話題はあるが、その相手がキクタであり、年齢差が結婚を反対される理由であったという話もまったくなしだ。

「まさか、あの男、逃げた……」

そう言うってから首を振った。

それはあり得ないわ。

香織は呟く。

あの男は真剣に梨花を愛していた。その事に間違いはない。そしてもし怖じ気づいたにしても、あの時の勢いのまま犯行に及んだのなら、気の弱いあの男に逃げ出す間などなかったはずだ。

いや、キクタのようなタイプの男は、相手が強気に出ると逆らうことが出来ない。まして相手は愛した女だ。あの時の熱狂のままに興奮したままで凶行に至ったであろう梨花に、キクタは決して逆らうことは出来なかった。たとえどれほど怯えていようと。

だから犯行現場にキクタがいたことは間違いないのだ。にもかかわらずキクタの名は出ていない。
どうして……。

香織は首を捻った。

何かが引つ掛かった。ただ単に警察が無能であり、キクタの存在を見逃しているとか、あるいはキクタが最初から犯行に参加していなかったとか、そんな単純な理由でキクタの名が出ていないとは、どうしても思えなかった。

香織の中の直観が告げるのだ。

恐ろしい何かが隠されている。

身震いするほどに恐ろしく、忌まわしい秘密が……。

闇の中を手探りで進んでいたら、ぬるぬるした何かに触れてしまったような、生理的な危機感。

キクタのことにこれ以上かかわるのは止めよう。香織は決意した。

陳腐な推論より神の直観よ。

香織は呟いた。

そしてその直観は正しかった。

蝋燭だけが陰気な光で照らしているその部屋の中で、二人の白髪の男が話してい

た。

一人は平成の白髪鬼、村田喜久次郎。そしてもう一人は、あのキクタムラジロウだった。キクタは今の部屋で目覚めたばかりだ。何が起ったのかわからないまま、閉じた瞼を上から揉みながら彼は言った。

「君は誰なんだ。ここはいつたい」

山ほどの質問が次々と頭に浮かんで、喉に詰まる。それを見て、喜久次郎は微笑んだ。飼い犬に対して浮かべる笑みだ。絶対的な支配者が被支配者に対して与える優しさ。

「少し手荒な手段に出たことをまずお詫びします」

喜久次郎は頭を下げた。

「君が私をここに運んだのか」

「何もかも私の指図です」

「どういふことなのか説明してくれるだろうな」

「まずは自己紹介から始めましょうか。私は村田喜久次郎」

「どこかで聞いたことがあるぞ……まさか……君は、あの」

言いながら、キクタは少しずつ後退した。目の前にいるのが、人の形をした毒蛇であることに今気づいたのだ。

「怯えないでください」

好々爺の如く喜久次郎はにこにこする。

「世間が言うほど、私は恐ろしい存在ではありませんよ」

「でも、平成の白髪鬼……」

「人食い鬼とか怪物とか、マスコミは勝手な名前をつけますよ」

じわじわとキクタに近づいた。

「わ、私を殺すつもりか」

キクタは小鳥のように震えている。

「殺す？ まさか。私は友達になりそうな人を殺したりしませんよ。あの時のことを覚えてらっしゃいますよね。宮澤充を殺したときのことを」

喜久次郎はキクタを見つめた。口元は笑っているが、視線は刺すように鋭い。

「……それは」

「ついさっきのことですから忘れるはずはないですよね。あの時あなたは梨花さんのお父さんに紹介されることになっていた。時間通りに宮澤家を訪れると、不機嫌そうな宮澤氏が待ち構えていた。そしてあなた達は応接室で話を始める。話がうまく言ったのか険悪な雰囲気になったのか、いずれにしても歓談は途中で終わる。油断していた宮澤氏の頭が花瓶で叩き割られたからです。それから出刃包丁で宮澤氏は何度も刺された。警察の発表では三十二箇所。興奮したでしょう」

わかってますよ、という顔でキクタを見つめる。

「無我夢中だった。そう、確かにあれを興奮と言うなら興奮していたのだろう。しかし私は」

「ああいうときは女の方が冷静なんですよ。あなたが三十二箇所を刺している間に、彼女は逃げ出してしまった」

「梨花が……」

そこまで言って後が続かない。ショックだった。梨花が後ろから父親の頭を花瓶で殴打したのを見て、キクタは用意してあった出刃包丁を持って飛びかかっていた。肉に包丁が刺さり、こつんと刃先が骨にあたる感触だけは覚えているが、その後のことは頭の中に爆弾でも落ちたように何も覚えていない。梨花も一緒に刺しているのだと

ばかり思っていた。

「そうです。彼女はあなたを捨てて逃げだし、近くの交番に駆け込み、警察官を連れて戻ってきた。その時には私があなたを連れて逃げ出していたわけですが」

「君は、君はどうしてあそこにいたんだ」

「もちろん偶然じゃない。すべては必然ですよ。あなた達と私を繋ぐ人間がいるんですよ」

「それは誰だ」

「間宮香織です」

しばらくキクタは考え込んでから、言った。

「あの探偵事務所の」

「その通り。あの女は悪魔ですよ。触れられた者はみんな不幸になる。不幸のミダス王だ。あなたも私も、あの女の犠牲者なんですよ」

キクタは俯き、しばらく黙りこんでいた。それから、何か決意したように、喜久次郎の目を初めて見返した。

「あんた何がしたいんだ。復讐か何かか。しかし、私はそれになんの関係もないよ。私に関係があるのは梨花だけだ。彼女以外のものには何の興味もない。その梨花が警察に囚われ、刑に服しようとしているんだ。あなたがあの探偵にどんな目にあっただか知らないが、一切協力する気はない。さあ、わかっただろう。私はこんなところで時間を潰しているわけにはいかないんだ。ここを出してくれ」

「ここを出てどうします」

「自首するつもりだよ」

「そうですね。あなたはそういう人だ。正直で純情で、たとえあなたを見捨てて逃げ出した裏切り者の女でも、決して見捨てない。愛しておられるのですよね」

「彼女は裏切ってなんかいない」

キクタは喜久次郎を睨みつけた。

「わかりました。彼女は裏切っていなかった。しかしね、キクタさん、そうであればよいに、今回の事件は茶番になってしまっただけですよ」

「それはどういう意味ですか」

「梨花さんもあなたも、あの女に吹き込まれるままに信じて殺人を犯した。あの女が梨花さんが父親と関係があるとか何とか、そんなことをあの女は言ったんですよ。そうですね」

キクタは頷いた。

「しかしそれは嘘だ。あなたたちは最初からあの女に騙されているのだ。騙されて殺人の罪を背負うことになったんだ」

「そんな、そんな馬鹿な」

「目を覚ませ！」

いきなりキクタの頬を叩いた。

「なにをするんですか」

強気の間を相手にすると、キクタはどんどん弱気になるのだった。

「いいから、私の説明を聞きなさい」

喜久次郎はどこからともなくラップトップパソコンを取りだし、アニメーションとスライドショウを駆使したプレゼンテーションをキクタに見せた。そしてたっぷり一時間かけて、宮澤充が娘に対して陵辱どころか手一つあげたことがないことを簡潔に論理的に、誰にでもわかるように懇切丁寧に説明したのだった。

「そうだったのですか」

キクタは膝をついてがっくりとうなだれた。信じやすい男なのだ。そこに喜久次郎が追い打ちをかけた。

「そんな馬鹿げたことで、梨花さんは罪を背負うことになってしまったんですよ。そしてあなたも。そんな茶番のために、ですよ」

「なんであの女はそんな嘘を言ったんですか」

「単なるお遊びですよ。ちょっと面白そうだからやってみただけ」

「面白そうだから……ですか」

キクタの中で怒りが燃え上がる音が聞こえるようだった。ついでに焦臭いにおいまでした。

「さあ、それでもあの女をそのままに許しておいて良いのですか」

「それは……」

「良いのですか」

喜久次郎はキクタの顔とくっつくほど顔を近づけ、その目を覗き込んだ。キクタは目を逸らさなかった。

時間が過ぎていった。

喜久次郎は待った。

そしてキクタは、ついにこう言った。

「一緒に戦いましょう。あの女と」

第二話 異端者の愛了